

## 尾崎行雄と第三回衆議院議員選挙

——立憲改進黨・自由党の候補者擁立過程を中心に——

中 元 崇 智

明治二七（一八九四）年三月一日、第三回衆議院議員選挙（以下、第三回総選挙で統一）が実施された。この選挙では自由党と国民協会・立憲改進黨・同盟倶楽部・政務調査会・同志倶楽部・東洋自由党の対外硬六派が激突し、改進黨幹部尾崎行雄が地盤とする三重県第五区（度会郡・志摩郡・南牟婁郡・北牟婁郡）でも激しい選挙戦が行われた。後に「憲政の神様」と称され、連続二五回当選を数えた尾崎は最も苦戦した選挙として第三回総選挙を挙げて、次のように回想している。<sup>1)</sup>

私は今日まで、何十回の選挙を経験したが、ほんとに苦しいと思つたのは、この時であつた。この時、解散を受けて選挙区に帰ると、意外にも門野幾之進君が、私と選

挙を争ふといふ注進があつた。私はギョツとした。門野君は、私のやうな他郷の風来坊とはちがつて、選挙区なる鳥羽町の出身で、しかも名家の御曹子であつた。私が慶應義塾に学んでゐたころは、若手のバリバリの教師で、子供心にも偉い人だ、自分の手本にしようと思ひこんだほどの人物であるから、私は大いに困つた（中略）

このように、尾崎が最も苦戦したとされる第三回総選挙にもかかわらず、尾崎と第三回総選挙をめぐる先行研究は数少なく、尾崎の伝記類でもふれられていない。<sup>2)</sup> 阪上順夫氏は第三回総選挙における尾崎の苦戦の原因について、尾崎の慶應義塾時代の師である門野が候補者となつたこと、尾崎がキリスト教徒であるという悪質な話が流されたためであると指摘

したが、詳細についてはほとんどふれていない。<sup>3)</sup>

一方、渡辺穰氏は明治期における尾崎行雄の総選挙について、度会郡や宇治山田町を拠点とした立憲改進黨系の尾崎支援組織である好友会を中心に分析した。<sup>4)</sup> 渡辺氏は好友会が白井清栄門や森本確なども三重銀行関係者や弁護士などを中心に構成され、その構成員を宇治山田町会、度会郡会、三重県会へと送り込む組織であったことを解明した。その上で、第三回総選挙を好友会と自由党系の正義会による本格的な激しい選挙戦と位置づけた上で、改進黨系の森本確が自由党系の門野幾之進との二位争いを制した結果、第五区が改進黨系の地盤になったと指摘した。

だが、渡辺氏の分析はあくまで好友会が分析の中心であり、第三回総選挙については、わずかに二頁弱の分析しかなされていない。その史料も尾崎行雄の書簡を収録した「森本確也関係文書」や『伊勢新聞』が中心となっている点に課題が残る。

また、筆者も『伊勢市史』で、第三回総選挙と自由党事務局員龍野周一郎や門野幾之進の擁立計画、立憲改進黨側の対抗策について記述した。<sup>5)</sup>

近年、加地直紀氏は第三回総選挙における三重県第五区の

選挙戦を分析した。<sup>6)</sup> そして、自由党機関誌『伊勢新聞』が門野幾之進の学識の高さを強調して尾崎を批判したこと、キリスト教の洗礼を受けた事実から尾崎批判を展開したことを明らかにした。また、加地氏は尾崎の自由党や政府への攻撃力である「健舌」によつて三重県内の党勢拡張に尽力したこと、時勢に応じて内地雑居論から条約勸行論に転換したことが選挙戦の勝利につながったとしている。加地氏の研究は三重県第五区選挙戦を『伊勢新聞』や『東京朝日新聞』、『大阪朝日新聞』などの新聞資料や『立憲改進黨党報』を用いて明らかにした点に意義があろう。

しかし、加地氏の研究は尾崎の書簡を収録した「大隈重信関係文書」や龍野の日記が収録された「龍野周一郎関係文書」などが全く分析されていない。また、候補者選定に至る経緯が新聞記事に依拠しているため、立憲改進黨の候補者が尾崎行雄に加えて、前議員の角利助ではなく森本確也になった経緯についても不明な点が残る。さらに、自由党候補者が龍野ではなく、門野になった経緯や自由党総理板垣退助らの関与についても明らかにされていない。その結果、立憲改進黨の地方組織好友会や自由党の地方組織正義会が候補者の擁立や

選挙で果たした役割についても分析が不十分であるといえよう。

そこで、本稿では、第三回総選挙を考察する上で重要な第二回総選挙の経緯と明治二六年の尾崎等による三重県遊説について検討する。そして、第三回総選挙における立憲改進黨・自由党の候補者擁立過程を再検討する。具体的には、三重県第五区における立憲改進黨の候補者擁立の過程について、「大隈重信関係文書」や改進黨系の新聞史料などを中心に解明する。一方、自由党の候補者擁立過程について、龍野の日記「選挙の塵」や三重県選出衆議院議員栗原亮一の「栗原亮一関係文書」、『伊勢新聞』を含む自由党系やその他の新聞史料等を用いて明らかにする。その際に、尾崎の回想に登場する尾崎・門野陣営で行われた妥協策の真偽についても再検討する。さらに、第三回総選挙の予想得票状況を分析した上で、尾崎・森本陣営の勝因を指摘したい。

## 第一章 第二回総選挙と好友会の成立

当時の総選挙は男子二五歳以上で直接国税一五円以上を納

める者に選挙権を与える制限選挙であり、原則一区一名の小選挙区制であった。しかし一枚の投票用紙に候補者を二名連記する二名連記投票制の二人区という例外もあり、三重県第五区も県下唯一の二人区であった。三重県第五区は度会郡、答志郡、英虞郡、北牟婁郡、南牟婁郡であり、おおむね現在の伊勢市以南全域にあたる広範な選挙区であった。

この三重県第五区を地盤としていたのが、尾崎行雄であった。尾崎は神奈川県津久井郡又野村出身であるが、父の尾崎行正が度会県の役人を務め、退官後も宇治山田町の郊外に住していた。尾崎は殖産事業などで熱心に活動した行正の縁を頼り、第五区から候補者になったとされる。<sup>7)</sup>そして、第一回総選挙（明治二三年七月一日）では、尾崎が一七七二票を獲得し、二位の北川矩一（一四三八票）とともに当選している。

だが、第二回総選挙（明治二五年二月一五日）は、尾崎行雄（立憲改進黨）、角利助（無所属・明治二四年七月一〇日の北川矩一辞職に伴う補欠選挙で当選）の前代議士と新人で自由党系の高木貞太郎、竹原撲一が激しく競り合う選挙であった。尾崎は「選挙干渉」や当時三重県を風靡していた地価修

正派から地価修正反対論者と誤解されて批判されたために、苦戦した。だが、尾崎は英虞郡鶴方村の大地主・三重県会議員で地価修正請願委員を務めたこともある森本確也<sup>8)</sup>の支持を取りつけ、答志・英虞郡（旧志摩国）の地盤を固める。この様子を成川尚義三重県知事は小松原英太郎内務省警保局長に以下のように報告している。<sup>9)</sup>

本県内第五区ノ形勢日々変遷実ニ危険相極メ候、尾崎モ今日ニ至テハ非常ノ奮発ニテ壮士モ雇ヒ運動費モ吝マス必至ニ各地村々遊説相勉メ居候。度会郡丈ケニテハ尾崎少数無頼候得共志摩全国ト北牟婁一郡ハ尾崎ニ服従致シ居、殊ニ志摩ノ森本確也ナルモノ全国中ノ財産家ニテ曾テ同人社ニテ修学致シ人物モ宜敷名望ハ勿論全国第一ニ候処、尾崎トハ旧来ノ交誼モ厚ク（中略）

この報告書によると尾崎派が壮士を集め、多額の運動費をかけて精力的に各地の村々を遊説していることが分かる。尾崎は地盤の度会郡では苦戦していたものの、英虞郡出身の森本の支援を得て、旧志摩国及び北牟婁郡で有利に立っていた。そして、尾崎は地価修正派と和解し、自らが地価修正に熱心であることを新聞紙上で広告する一方、各地を遊説して支

持を集めた。その結果、尾崎は角（一二六三票）に次ぐ、二位当選（二一〇四票）を果たし、高木（八五七票）、竹原（二九六票）は落選となった。<sup>10)</sup>

二月一七日、尾崎は立憲改進黨の代議総会会長大隈重信宛の書簡で、第二回総選挙における各候補の獲得予想票数を報告した上で、残票が高木に全て入っても自らの当選は確実であると述べた。<sup>11)</sup>そして、尾崎は「只残念なるは斯るツマラヌ者共を敵手となし乍ら最大多数を得る能はさりし一事に御座候」と、角や高木等「ツマラヌ者共」を敵としながら、一位当選を角に奪われた悔しさを吐露したのである。

第二回総選挙の苦戦を受けて、尾崎派は三重県会への進出を図り、明治二五年三月九日の度会郡選出（改選定数二）の県会議員選挙で尾崎派の現職喜多正兵衛と新たに船越楯吾を候補者とする。その結果、船越は落選したが、喜多を当選させた。この選挙には第二回総選挙で尾崎に敗れた高木貞太郎ら自由党系も、高木と自派の奥山迂吉を候補者として擁立した。その結果、高木は落選したが、奥山を当選させたのである。<sup>12)</sup>このように、宇治山田町を中心とする度会郡において党派対立が激化する中で、三月に「尾崎派の白井清榮門、船越

榎吾、山羽九郎兵衛等の諸氏を始めとし六十有餘名の人々は宇治山田町を本陣とし好遊会なる者を設け<sup>13</sup>たのである。

好友会とは宇治山田町及び度会郡を拠点とし、第二回総選挙における尾崎派を中心に結成された立憲改進黨系の政治団体である。渡辺穰氏の先駆的研究によると、好友会の幹部は白井清栄門（伊勢古市の妓楼油屋当主で宇治山田町会議員・宇治山田町長・県会議員を歴任）、山羽九郎兵衛（三重銀行取締役）、尾崎一兵（弁護士）、船越楯吾（弁護士）、辻村弥八（度会商工銀行頭取）らであった<sup>14</sup>。そして、好友会は四部構成となっており、第一部が宇治山田町と隣接する伊勢湾沿岸地区町村、第二部が宮川を超えた小俣村・城田村・外城田周辺・田丸町などの北西地域、第三部が熊野灘に面した南島地域、第四部が北牟婁郡に近い大内山村などの山間地帯であったとされる。

好友会は三月二二、二三日の宇治山田町会議員選挙にも進出し、定員一六名中自派から一一名を当選させ、宇治山田町会を支配下に置いた<sup>15</sup>。四月一七日、好友会は正式に発会、五月一日には総会を開催し、役員選挙を実施した<sup>16</sup>。

こうした好友会「立憲改進黨系の勢力拡大に対して、自由

党系は明治二五年六月二二、一六日に正義会の協議会を開催一六日には郡内各町村長を呼んで将来の運動上の準備について協議した<sup>17</sup>。七月には高木貞太郎が南勢地方を遊説して、正義会員募集の「誘説」を行うなど、自由党系の組織化を進めたのである<sup>18</sup>。

## 第二章 尾崎行雄の三重県遊説と党勢拡張

明治二六年五月六日、好友会春季大会が一〇〇余名を集めて宇治山田町で開催された。そして、仮会長白井清栄門の下、好友会細則を修正して常議員を二〇名から三〇名へと増員し、白井や山羽九郎兵衛、尾崎一兵、船越楯吾、辻村弥八ら三〇名を選出した<sup>19</sup>。

一方、尾崎行雄も五月二五日に東京を出発、改進黨幹部の島田三郎らとともに愛知、岐阜、三重県を精力的に遊説した<sup>20</sup>。尾崎は三八回演説して、改進黨への入党者五二二名を獲得し、七月一五日に帰京している。特に、宇治山田町を中心とする三重県第五区には二度も地元入りするなど、党勢拡張と地盤固めを精力的に行った。以下、その遊説の概要を紹介する。

五月二十九日、立憲改進黨遊説員の尾崎行雄、島田三郎、首藤陸三、中野武嘗等は三重県松坂町の政談演説会を経て宇治山田町に入り、中岡楼で二三〇名を集めて盛大な歓迎会が開催された。翌三〇日には三重県菓子正楽組、山田組合員松本源次郎、村井榮之輔、大田藤次郎等一三〇名が旅館を訪れ、尾崎、島田等五名の衆議院議員に菓子税則廃止に尽力したことに對して感謝状を渡した。<sup>21)</sup> 同日五月三〇日、宇治山田町新道新北座で開催された政談演説会で尾崎は「第四議会の報告」の題名で演説し、聴衆五〇〇名以上を集めたと報道されている。<sup>22)</sup> そして、尾崎は政府が第四議会に地価修正法案を提出しながら政略のために貴族院で否決させたことを不徳義・無節操と鋭く批判した。その上で、明治天皇の「和協の詔勅」によつて、官僚の給料一〇分の一を海軍の軍艦建造費に充当する政府の政費節減方針について、それでも政府高官は高給であると鋭く攻撃している。

尾崎等一行は五月三十一日に答志郡磯部村、六月一日には度会郡田丸町と宇治山田町で演説を行った。<sup>23)</sup> 二日にわたる演説会で約六五〇〇名を集め、好友会の会員二〇〇余名が改進黨に入党したとされる。その後、尾崎一行は三重県の津、四日

市、桑名を経て、愛知県・岐阜県を遊説し、六月二日に尾崎のみ一行から別れて再度宇治山田町に入った。そして、尾崎は六月一七日から七月五日まで三重県第五区の度会・南牟婁・北牟婁・答志・英虞郡の各地で精力的に政談演説を行つて多数の黨員を獲得する一方、七月七日には田丸町の第二部好友会総会に参加して演説した。<sup>24)</sup> そして、七月九日には宇治山田町で尾崎の送別会が開催された。この会には、好友会員だけでなく、宇治山田町古物商組合や烟草商組合員など百数十名が参加していた。<sup>25)</sup>

このように、明治二六年五月〜七月における尾崎一行の遊説は三重県第五区の各郡を網羅しており、多数の黨員や菓子業界、古物商組合など、一部の業界関係者の支持を獲得して支持基盤を拡大したといえよう。また、尾崎は政費節減問題などで鋭い政府批判を展開し、第二回総選挙で争点となつた地価修正問題に言及して、選挙民の支持を獲得していったのである。

一〇月七日、宇治山田町で度会郡における立憲改進黨大会が開催された。この大会は「門柱の右側に改進黨大会、左側に好友会秋季大会と記せり」とあるように、好友会の秋季大



会を兼ねていた。<sup>(26)</sup>そして、改進黨事務所を宇治山田町に設置することや本部に対する地方委員一〇名を置くこと、各町村に二名以上五名以下の委員を置くことなどが決定された。そして、地方委員には白井清栄門、山羽九郎兵衛、乾逸太郎、尾崎二呉、喜多正兵衛等好友会幹部が就任しており、この大会では同時に好友会の規約修正が行われている。つまり、地方団体である好友会を母体として改進黨は事務所を設置したのであり、実質的に好友会が立憲改進黨の地方組織を兼ねることとなった。

一方、三重県の自由党勢力は明治二六年六月一五日に三重県自由党支部を津市に設置した。<sup>(27)</sup>そして、六月下旬には天春文衛（自由党衆議院議員・三重県第三区選出）ら三名が自由党本部に板垣退助総理以下の遊説を要請したのである。七月一五日、板垣と自由党本部の齋藤珪次、龍野周一郎等が三重県遊説のために東京を出発した。板垣一行は七月一七日に三重県名張町、一八日に上野町、一九日に亀山町、二〇日に神戸町・四日市町、二一日に桑名町で政談演説を行い、二二日に板垣は桑名から東京へ帰京した。<sup>(28)</sup>一方、板垣一行と別れた齋藤、龍野と天春文衛は七月二三日に宇治山田町で演説して

いる。

この後、龍野等は度会郡中川村、小川郷村、鶴倉村、穂原村での演説を終えて、自由党最高幹部で衆議院議長長の星亨と松坂で合流した。七月二九日には、星や龍野等が度会郡田丸町や宇治山田町で演説し、改進黨批判を展開している。特に、星は改進黨を「国家に大害を蒙らしめんとしたる条約改正の外、塵一本も為したることがないから、諸君が信用するの政党と言ふことは出来ない」とまで極言した。<sup>(30)</sup>

この七月二九日の聴衆は四五〇〇余名、園遊大懇親会の来会者は三五〇余名、入党者は一五〇余名を数えたとされる。<sup>(31)</sup>遊説に尽力したのは全員が正義会であり、笹尾新吾、奥山迂吉、高木貞太郎らであった。七月三〇日の鳥羽町における政談演説会に際しては、衆議院議員栗原亮一（答志郡鳥羽町出身で当時第四区から補欠当選していた）の養父である栗原亮休、叔父の奥村善八らも参会しており、栗原の影響力もうかがわれる。<sup>(32)</sup>この後も自由党への加盟者は度会郡などで増加したとされ、自由党による痛烈な改進黨批判は三重県第五区の党派対立をさらに熾烈にしたといえよう。<sup>(33)</sup>

### 第三章 立憲改進黨・自由党の候補者擁立と政治的背景

明治二六年一月二八日、第五議会が開会した。だが、第五議会では、第二次伊藤博文内閣が推進する条約改正に対して、賛成の自由党と現行条約勵行を主張する国民協会・立憲改進黨・同盟倶楽部・政務調査会・同志倶楽部・東洋自由党の対外硬六派が激しく対立した。そのため、一月三〇日に第五議会は解散され、自由党と立憲改進黨は第三回総選挙で激しく激突することとなる。

明治二七年一月初旬、自由党本部は選挙の方針として、党员および同志者は特殊の事情がない限り前代議士を再選すること、同主義者による同志討ちをしないこと、金銭による選挙民の饗応などをせず、節約して正義の選挙を心がけることを各県支部に通知した。<sup>(34)</sup>

一月一日、自由党総理板垣退助は長野県にいた龍野に「三重県第五区の候補者たる事を承諾すべき旨の督促」をした。<sup>(35)</sup>当初、立憲改進黨系の新聞「毎日新聞」は三重県第五区

の候補者として、尾崎行雄（前職）と自由党の龍野周一郎が戦い、尾崎は角利助（前職）と提携するか、三重県会常置委員の森本確也とともに候補者になるかは確定していないが、「尾崎氏の当選は疑なしと云ふ」と報じている。<sup>(36)</sup>また、立憲改進黨系の『郵便報知新聞』も自由党がまず三重県第五区の候補者として、自由党最高幹部の松田正久（佐賀県選出の元衆議院議員）を擁立しようとしたが、勝算が乏しく断念し、続いて龍野の擁立を計画したと報道している。龍野は長野県出身であり、いわゆる「落下傘候補」であった。「落下傘候補」龍野擁立の背景について、龍野の日記「選挙の塵」では次のように記している。<sup>(38)</sup>

又板翁、河野、栗原、天春諸氏を訪ねて郷里巡回の概況を報し、併せて三重県に候補たる事を辞す、是より先き三重県第五区自由主義者の団体なる正義会に於て八余を迎へて同区の候補たらしめんとし、全区の我党员齊しく之を希ひ、三重県我党前代議士及び先輩諸氏亦大に之に賛して斡旋し、板翁も大に之を喜び屢々懇諭ありしを以て（中略）

このように、自由党系の正義会は龍野を三重県第五区の候



補者に擁立しようとしていた。龍野が前年の三重県遊説に参加したことに加えて、県選出の自由党前代議士（栗原亮一・天春文衛）及び「先輩諸氏」が龍野擁立に賛成して斡旋したため、板垣もこの話を大いに喜んで龍野に承諾するよう督促したのである。注目すべきは候補者の擁立が地方団体の正義会から三重県選出の前代議士栗原と天春の斡旋を経て板垣・河野広中の党最高幹部に伝えられていることである。しかし、龍野は地元長野県の同志と相談の上、この話を断った。

そこで、白羽の矢が立ったのが、尾崎の慶應義塾時代の恩師であった門野幾之進と『自由新聞』記者奥野（溝口）市次郎であった。一月三〇日、『郵便報知新聞』は「溝口氏は滑稽候補者の称ありて到底尾崎氏の敵にあらざるより遂に慶應義塾教頭門野幾之助<sup>④</sup>氏を起して尾崎氏に当らしむる事となせり」と報じている。さらに、門野は栗原と親交があり、栗原の紹介で板垣総理に知られたこと、「運動費は自由党にて一切支弁すべしと勧誘せられて承諾したるなりといふ」とされている。

前述したように、栗原は門野と同郷の鳥羽町出身であり、栗原が板垣に門野を紹介したと考えられる。この経緯を裏付

けるのが、明治二七年一月二七日付栗原亮一宛門野幾之進書簡である。この書簡によると、栗原からの家格、生年月日の問い合わせに対して、門野は自らの家は二〇石であり、鳥羽伏見の戦い後に家老格を得たこと、生年月日は安政三年三月一四日であると回答した。さらに、門野は栗原に同書簡で次のように述べている。

板垣先生関西出馬之砌八必ず三重県へ立寄有之様、呉々御依頼相願候。地方之様子次第、小生八何時二ても出発可致候得者、兼て申上候通り之事情故、可成滞在日数多からざる様御談合御願候。過日來度々溝口氏來訪相成候得共、不在而已二て面接を得ず。

同氏に御面晤之節宜敷御致声可被下其内小生方より訪問可仕候。同氏八何時頃出発之筈に相成居候二や。余八拝眉の節に譲る。

このように、門野は板垣の三重県第五区での遊説に大きな期待を寄せていた。また、門野は三重県第五区の様子次第でも出発すると述べる一方、「事情」があつて滞在日数を多くないように談合してくれるよう、栗原に調整を依頼している。さらに、門野は同じ三重県第五区の候補者奥野（溝

口)とも選挙日の約一カ月前にもかかわらず、度々訪問するも面会でできていなかった。つまり、三重県第五区の候補者門野は栗原を中心に擁立されたが、急ごしらえの候補のため、準備や奥野との調整が不足していたといえよう。

一方、立憲改進黨は明治二十七年一月二日に党大会を開催し、前代議士を擁立することや臨時選挙事務所を東京に設置すること、各地の状況を選挙本部に通知することを決定した。<sup>(41)</sup> 注目すべきは、大会では「前代議士は進んで候補者たるべき事」としつつ、前代議士がやむを得ず候補者を辞退した場合は「自党若くは自派の人を推薦すべき事」と自党・自派にこだわった点である。改進黨大会の決議に沿った場合、第五区の候補者は前代議士の尾崎行雄を推すことで確定していた。だが、もう一名の候補者を誰にするかが問題となった。その候補者となったのが、同盟倶楽部の前代議士角利助と森本確也である。

一月一〇日、大隈重信と前衆議院議長で同盟倶楽部の領袖楠本正隆の会談があった。『読売新聞』によると、楠本は「民党各派の間に同志打ありて八甚だ不都合なれば地方の事情萬止むを得ざるものゝ外成るべく互に交譲して同士打を為

さざる様致したし」と述べて、大隈も「改進黨に於て八更に異議なき旨」を返答していた。<sup>(42)</sup>

一月一七日、好友会は宇治山田町で白井清栄門、山羽九郎兵衛ら六〇余名が会合、第五区の立憲改進黨候補について協議を開いた。自由党系の『伊勢新聞』は、立憲改進黨本部の通牒を受けて、好友会が角利助を立憲改進黨に入党させて候補者にする計画であつたとする。<sup>(43)</sup> だが、角が断つたため、森本確也を立憲改進黨に入党させて候補者にすることを決議したとされる。当初、森本も角を推す意向であつたため、森本等は角入党を説得した。<sup>(44)</sup> だが、角は同盟倶楽部員として改進黨と連携して運動してきたことを述べた上で、改進黨へ入党しなければ信任しがたいのであれば、候補者となることを断念すると述べたとされる。<sup>(45)</sup>

さらに、『伊勢新聞』は角が尾崎等改進黨と連携して選挙運動をしたいとの希望を楠本を介して大隈に伝言し、大隈の承諾を得たと報じた。<sup>(46)</sup> そして、大隈は好友会に角の希望を伝達したが、好友会は第二回総選挙で尾崎が地価修正問題によって批判を受けた際に角が尾崎との關係を断絶した挙動を恨み、大隈の伝言を拒否したとも伝えている。

こうした一連の報道を検証する際に重要なのが、以下に引用する明治（二七）年（一）月二五日付大隈重信宛尾崎行雄書簡である。<sup>47</sup>

角利助氏の儀に付楠本氏より種々御依頼申上候由なれ共、独り当地のみならず全国各地共に地方限りの事情有之、本部より命令する訳けには参り難く、結局地方の自治に任かせるの外なしと存候。申上るまでもなく右の方針にて諸人江御話相願度候。当区は先きに有志家の相談会を開て粗ぼ角氏を排斥する事に予決致候。尚ほ来る廿八日各町村の同志大会を開て最後の決定を為す手筈に御座候。気の毒ながら角氏は多分排斥致さるべしと存候。此等の儀に付ては小生は区内有力者の意見に一任する考に御座候。角氏排斥せらるゝ上は我党員森本確也氏当選可致候。氏は確乎たる人物にて将来多望の人に有之候。尚ほ楠本氏へは小生より直接に事情通知可致候。

この書簡から楠本が大隈を通じて角の候補者擁立を打診していたことは事実と認められよう。しかし、『伊勢新聞』の報道と異なり、好友会だけでなく、既に宇治山田町に帰還していた尾崎も三重県第五区の「地方限りの事情」、「地方の自

治」という理由を挙げた上で、「区内有力者の意見に一任する考えを示して角の候補者擁立を拒否していた。

一月一〇日の大隈・楠本会談の合意では、「地方の事情萬止むを得ざるものゝ外成るべく互に交譲」することが合意されていたが、尾崎や好友会はまさに「地方の事情」を拒否の理由に挙げたのである。その上で、尾崎は三重県第五区の「有志家の相談会」が角を排斥することに予決し、二八日の各町村の同志大会で最終決定されるといふ予測を述べている。さらに、尾崎はその後に森本確也が予選で当選するという見込みを述べて、森本を「確乎たる人物にて将来多望の人」と高く評価した。

実際に、尾崎の書簡通りに三重県第五区の候補者は決定されるが、注目すべきは好友会が候補者擁立の決定権を有していたことである。また、尾崎は角が「気の毒ながら」排斥されるとの予測を述べていたが、第二回総選挙後の書簡で角等を「ツマラヌ者共」と批判していた経緯を踏まえると、角よりも改進黨員の森本の方が望ましかつたと考えられる。<sup>48</sup>

さらに、森本は第二回総選挙の際に尾崎を強力に支援して尾崎勝利の一因となったことから、連携する候補者として大

きな意味を持った。そして、旧志摩国（答志・英虞郡）を地盤とする門野幾之進が候補者となったことから尾崎ら改進黨系が旧志摩国で得票するためには、答志・英虞郡を地盤とする森本が望ましい候補者であったと思われる。結局、森本が候補者となったことにより、門野が「志摩国一國を占領し得べし」との目算は崩れ、「森本確也氏は志摩王の称ある人物なれば門野氏の胸算は塵氣楼と一般なるべし」と言われる状況になったのである。<sup>(48)</sup>

一月二十八日、三重県第五区の有志者大会が開催された。尾崎の予想通り、満場一致で尾崎と森本が候補者に選定されたのである。<sup>(49)</sup> 角を推した楠本正隆は「角君は大分心配に及ひたれとも森下<sup>(本)</sup>とて改進黨員の推す地盤の協議により到底絶念の外なき勢に赴けり」と同盟倶楽部の前代議士に書簡を送っていた。<sup>(50)</sup> この書簡からも角排斥、森本擁立は好友会が主導したといえよう。

#### 第四章 三重県第五区における選挙戦

明治二十七年一月二日、尾崎行雄は出迎えに来た白井清栄

門等とともに宇治山田町に帰還し、そのまま選挙区へ直行した。<sup>(51)</sup> 一月二十八日に前述した有志者大会で候補者に選出された後、尾崎は二十九日に微恙のため二見浦で海水浴を行って療養する。<sup>(52)</sup>

二月一日、尾崎は宇治山田町の古市長盛座で森本確也とともに演説した。<sup>(54)</sup> 森本は演説で「改進黨の党議に背かず選挙区民に忠勤を尽くすべし」と述べており、自らが改進黨員として選挙民に尽くすことを強調した。一方、尾崎は現内閣を痛烈に批判したため、臨席警官より演説の中止・解散に追い込まれている。尾崎・森本一行は二月一日・二日に南牟婁郡木本町でも演説し、さらに同日午後には有井村でも演説した。<sup>(55)</sup> 一方、尾崎の回想では、自由党≠門野の運動者より尾崎、門野の当選による妥協が図られたとしている。<sup>(56)</sup>

すると先方の運動者から、妥協を申込んで来た。元来私の選挙区は、一区定員二名で、私は森本確也君を連れ、門野君は自由党の雄弁家奥野市次郎君を携へていたので、双方から一名ずつ当選させることにすれば、門野君も私も、共に楽に当選できるわけである。私の同志中にも、これを希望するものがあつた。そこで私はまた演説した。

「薬なら薬、毒なら毒、何れか一方に決めなくてはならぬ。薬を一盃、毒も一盃では、あまりに無意義すぎる。森本君に投票することが嫌な人は、私にも投票してくれるな」この趣旨で全選挙区を説き廻つて、自由党と戦つた。その結果は、我々の方が意外に好成績で、私と森本君とは、ほとんど同点数で当選した。

このように、尾崎の回想では、門野の運動者が尾崎と門野を当選させる妥協を申込み、尾崎の同志にも妥協を希望する者があつたとする。だが、尾崎は妥協に応じず、森本に投票しないならば自分にも投票しないように呼びかけ、意外にも好評を得て二人ともほぼ同点で当選したとされる。だが、事態はそのような単純なものではなく、尾崎派からも門野へ候補者となることを断念するように働きかけが行われていた。

慶應義塾の塾友で尾崎陣営の橋正雄（好友会員）と野呂巽之助（後に県会議員）は門野に「痛く門野氏が今度の挙動を惜み此際此の不利を察知しながら黙過するは友誼上忍びざる処なり」と此の際懇篤質実なる書面を送りて反覆忠告<sup>57</sup>していた。これに対して、門野はいったん候補者となることを承諾した以上、到底思いとどまることはできないと返書を送つ

た。こうした事態に、尾崎は平素政治に口を開かない学者（門野）に多額の運動費を供与して激烈の競争を試みさせるのは、福澤諭吉の本意を理解しがたいとして「満腔の憤慨を傾尽せし」一書を慶應義塾関係者の社交倶楽部である交詢社に送付したとされる<sup>58</sup>。

一方、門野が尾崎の旧師であることから師弟同区で候補を争うことになるため、「尾崎氏に対して忠告書を寄せたる者ありし」とも報じられている<sup>59</sup>。これについては、自由党系の関与があつたとも考えられるが、忠告書の差出人は不明である。

尾崎・森本に対して、自由党候補の門野幾之進、奥野市次郎の選挙区入りは遅く、宇治山田町に到着したのは二月九日であつた。途中、津市では高木貞太郎以下三名、松阪停車場では栗原亮一が合流して、宇治山田町宇仁館で約一〇〇名を集めて懇親会を開催した<sup>60</sup>。まず栗原が門野、溝口兩人を紹介した上で、門野・奥野がそれぞれ衆議院議員候補者となつた由来と決意について演説している。

二月一〇日には鳥羽町大里の常安寺における政談演説会で栗原、門野、奥野が登場した。栗原は「媒人口」と題して、

「門野、溝口兩氏を挙るの必要希望」を述べて、兩人の略歴にふれている。<sup>(61)</sup>このことから前述の一月二十七日付栗原宛門野書簡は門野の家格や生年月日を知るために栗原が門野に送った書簡に対する返事であることが分かる。さらに、自由党は三重県自由党支部の請求を受けて、三重県第二区、第三区、第五区に一〇〇〇円ずつ選挙運動費を送り、栗原が候補者となった第一区にも二〇〇〇円を送金したと報じられた。<sup>(62)</sup>前述の門野の選挙資金は自由党が支出するとの約束通り、自由党本部も資金援助を惜しまなかったようである。

次に、自由党が取った選挙戦術は機関紙『伊勢新聞』による尾崎に対するネガティブキャンペーンであった。この点については、加地氏の研究に詳しいが、自由党系によって喧伝された尾崎行雄「キリスト教信者説の流布である。<sup>(63)</sup>当初、立憲改進黨系の『三重新聞』は自由党の候補者門野が「外教信者」(キリスト教徒)であるとして、伊勢神宮のある「神都を汚す者」であると批判したとされる。<sup>(64)</sup>これに対して、栗原は二月九日の懇親会の席上、門野がキリスト教信者でないことを強調した。その上で、栗原は尾崎が東京麻布のキリスト教会で洗礼を受けた記録があるとして、尾崎こそがキリスト

教信者であると厳しく批判したのである。これを契機に、『伊勢新聞』は尾崎「キリスト教信者説を流布し、『尾崎行雄氏基督教徒たるの確証を表白せん』と、ネガティブキャンペーンを実施したのである。<sup>(65)</sup>

さらに、門野は栗原に「板垣先生関西出馬の砌八必ず三重県へ立寄有之様、呉々御依頼相願候」と自由党総理板垣退助の選挙応援を依頼しており、この要請が実現した。<sup>(66)</sup>二月九日、板垣一行は宇治山田に到着した。板垣一行は二〇日に度会郡田丸町、宇治山田町、二一日に答志郡磯部村で政談演説会に臨み、門野・奥野の選挙を応援している。<sup>(67)</sup>

二月二日、板垣は磯部村から大阪へ向けて出発したが、板垣の演説は「板垣総理の大旆一たび田丸に臨み、山田に駐まらば同郡の大勢は自由の風に靡くべく」と『自由新聞』が報道するなど、その演説の効果が期待された。<sup>(68)</sup>しかも、板垣は自分の地元である高知県の自由党員杉村楠弥太を三重県第五区に応援弁士として派遣し、門野、奥野を支援させており、自由党本部も三重県第五区に注力していたことが分かる。<sup>(69)</sup>

だが、板垣遊説が終了した直後の二月二日、門野は帰京の途に就いた。<sup>(70)</sup>五日後の二六日、門野は再び選挙区入りする



が、投票日までわずか三日しか残っていなかった<sup>(72)</sup>。門野が選挙当日までに三重県第五区に滞在したのは、合計わずか一六日間であり、選挙後も滞在した尾崎・森本と比較しても短かったといえよう。

これに対して、尾崎、森本は二月二六日に宇治山田町で政談演説会を開催、尾崎の地盤で好友会員を中心に三〇〇名を集めて支持を訴えた。特に、尾崎は「改進黨の本領」の題名で演説し、板垣や自由党を痛烈に批判したのである<sup>(73)</sup>。

三月一日、第三回総選挙が実施された。その結果は自由党一二〇、改進黨四九、国民協会二七、選挙後に結成された立憲革新党三七議席などであった<sup>(74)</sup>。一方、三重県第五区の結果は尾崎行雄が一〇七四票、森本確也が九七五票で当選し、門野幾之進は八三〇票、奥野市次郎は七七二票で落選した<sup>(75)</sup>。なお、候補を断念した角利助も四四票を獲得している。

最後に、【表一】を参照しつつ、『伊勢新聞』が明治二七年三月三日号で報じた当局による候補者別得票予想から得票状況を検討する。

まず、三重県第五区の選挙人（有権者）は二一一人であり、【表一】のように、度会郡二二六六人、答志郡二五一人、

【表一】 第三回総選挙における三重県第五区候補者別得票予想

候補者名	尾崎行雄	森本確也	門野幾之進	奥野市次郎	角利助
所属政党	立憲改進黨	立憲改進黨	自由党	自由党	同盟倶楽部
度会郡得票予想 (選挙人 1266 人)	675	638	454	437	×
答志郡・英虞郡得票予想 (選挙人：答志郡 251 人 + 英虞郡 131 人)	161	161	190	157	×
北牟婁郡得票予想 (選挙人 93 人)	42	27	41	43	×
南牟婁郡得票予想 (選挙人 372 人)	139	96	212	204	×
得票予想合計	1017	922	897	841	×
実際の得票数	1074 (当選)	975 (当選)	830	772	44
得票の誤差	+57	+53	-67	-69	×

\* 『伊勢新聞』明治二七年三月三日号雑報「県下各区の得点者予報」、三月七日号電報「第五区当選者」より作成。選挙人の人数は『伊勢新聞』明治二七年一月一七日号雑報「衆議院議員選挙人数」に依拠した。なお、候補者となることを断念した角は得票予想がないため、実際の得票数のみ記載した。

英虞郡一三二人、北牟婁郡九三人、南牟婁郡三七二人となっていた。選挙人全体で占める割合は度会郡が五九・九%、答志郡一・九%、英虞郡六・二%、北牟婁郡四・四%、南牟婁郡一七・六%であり、選挙人の約六〇%が度会郡で占められていた（小数点第二位を四捨五入）。これに続くのが、南牟婁郡であるが、旧志摩国（答志郡、英虞郡）では一八・一%となり、わずかに南牟婁郡を上回っている。

【表一】の候補者別得票予想と実際の得票の誤差は、改進黨系の尾崎が五七票、森本が五三票を積み増しており、逆に門野が六七票、溝口が六九票を減らしている。この点については、棄権票や候補を断念したものの、角利助が獲得した四四票が影響している可能性もある。

このように、【表一】の候補者別得票予想には誤差が存在しているが、どの候補がどの地域で得票したかの大きな傾向を知る上で手がかりとなりうるため、この史料から尾崎・森本の勝因（門野・奥野の敗因）を指摘したい。

第一の勝因は、尾崎が最大票田の度会郡で過半数の六七五票（五三・三%）を獲得するとされ、森本も六三八票を獲得すると予想された点にある。逆に、門野・奥野は度会郡で

尾崎に二〇〇票以上の差をつけられると予想されたことが致命傷になったと考えられる。第二回総選挙後に好友会が組織されたことや明治二六年の尾崎等による遊説、さらに第三回総選挙中も尾崎が門野より精力的に遊説したことなどによって、好友会を中心とする度会郡の地盤が機能したことが有利に働いたといえよう。

第二の勝因は、尾崎・森本が答志・英虞郡で一六一票を獲得すると予想されるなど、健闘した点にある。森本と尾崎の予想得票数が一六一票で同数であることは、二名連記投票制で森本に投票した有権者は同時に尾崎の名前を記入したと予想される（逆に尾崎に投票した選挙人は森本にも投票したと予想される）。その意味で、英虞郡出身の森本が候補者になったことは、尾崎の英虞・答志郡における得票も固めたとも考えられる。一方、答志郡鳥羽町出身の門野は地元の答志・英虞郡（合計三八二人）で一九〇票に留まっており、尾崎らに大差をつけられなかったようである。その意味で、好友会が森本を候補者にしたことも勝利の一因と思われる。

一方、門野・奥野は南牟婁郡で二〇〇票以上を獲得すると予想されたが、北牟婁郡では尾崎と予想得票数が伯仲してお

り、尾崎等との差を広げることができなかったようである。結果的に、門野・奥野陣営が南牟婁・北牟婁郡で尾崎・森本に大差をつけられなかったことも敗北の一因といえよう。

### おわりに

本稿では、尾崎行雄が最も苦戦したとされる第三回総選挙を検討した。具体的には、第二回総選挙以降、尾崎を支持する好友会の成立と発展、立憲改進黨・自由党による候補者擁立の過程、第三回総選挙における両陣営の動向と得票予想を分析し、その勝因を考察した。

まず、第二回総選挙で苦戦した尾崎は自らの支持基盤である好友会と連携しつつ、三重県会や宇治山田町会に支持基盤を拡大した。特に、明治二六年の尾崎等立憲改進黨による遊説は三重県第五区の各郡を網羅する精力的な遊説であり、第三回総選挙につながる支持基盤を固めたものと考えられる。

そして、第三回総選挙前夜、好友会は前代議士の尾崎と並ぶ候補者として名前が挙がった同盟倶楽部の角利助を排斥し、立憲改進黨に入党した県会議員森本確也を候補者とした。好

友会と尾崎は角による楠本正隆 大隈重信を通じた依頼を拒否し、改進黨員となった英虞郡出身の森本を候補者に擁立したのである。第二回総選挙でも尾崎勝利に寄与した、英虞郡出身の森本を擁立したことは第三回総選挙を有利に運ぶこととなったと考えられる。

一方、自由党は当初、龍野周一郎に候補者となるよう自由党系の正義会から栗原亮一等三重県選出前代議士の斡旋を経て板垣総理にまで要望が出されたが、龍野自身が断つた。そのため、栗原が中心となり、尾崎の慶應義塾時代の師匠である門野幾之進と奥野市次郎が候補者となったのである。本稿では、改進黨・自由党の候補者擁立過程を分析し、地方団体の要望が前代議士の斡旋を経て党本部の承認を得ていた（あるいは地方団体が党本部の意向を拒絶していた）ことを一次史料に基づいて実証的に明らかにした。

さらに、第三回総選挙の獲得予想票数を分析し、尾崎・森本陣営の勝因を分析した。尾崎・森本陣営の勝因は最大票田の度会郡で圧勝したこと、門野の出身地である答志・英虞郡で、森本を擁立したことにより尾崎・森本陣営が善戦したこと、門野・溝口が南牟婁・北牟婁郡でも尾崎・森本に大差を

つけられなかったことであつたと推定した。

つまり、第三回総選挙では、尾崎がこれまで重点的に遊説してきた、好友会を中心とする度会郡の地盤と、森本の答志・英虞郡における地盤による協力体制が自由党の挑戦を阻んだといえる。こうして、三重県第五区を切り崩そうとした自由党の挑戦は失敗に終わり、三重県第五区は好友会「立憲改進党の地盤として確立していった。

なお、本稿の分析を通じて、尾崎の回想録に登場する、門野が自由党の候補者となつたために苦戦したとする単純なストーリーや自由党陣営からの妥協案で尾崎・門野一名ずつの当選を図つた記述などは事実と相違することが分かつた。自由党は龍野の候補者擁立を図つた後、門野を擁立するなど迷走しており、尾崎陣営も門野に候補者となることを辞退するように迫るなど、なりふり構わない画策を展開したのである。こうした「憲政の神様」尾崎行雄が残した回想録の再検討も今後の課題といえよう。

【注】

- (1) 尾崎行雄『尾崎弔堂全集』一一巻（公論社、一九五五年）、二五八頁。
- (2) 伊佐秀雄『尾崎行雄』（吉川弘文館、一九六〇年）。
- (3) 阪上順夫『尾崎行雄の選挙 世界に誇れる弔堂選挙を支えた人々』（和泉書院、二〇〇〇年）、七〇～七二頁。
- (4) 渡辺穰『明治期における尾崎行雄の選挙（二） 好友会の盛衰』、『法政史学』七〇号、二〇〇八年。
- (5) 『伊勢市史』四巻 近代編（伊勢市、二〇二二年）、三〇七～三二七頁。
- (6) 加地直紀『第三回帝国議会衆議院議員総選挙と尾崎行雄』（『平成法政研究』二六巻一、二〇二二年）。
- (7) 前掲『尾崎弔堂全集』一一巻、二〇九頁。
- (8) 『議会制度百年史 衆議院議員名鑑』（衆議院・参議院、一九九〇年）六五八頁、廣新二『日本政治史に残る三重県選出国會議員』（廣新一発行、一九八五年）三九頁。
- (9) 明治（二五）年一月二六日付小松原英太郎宛成川尚義報告書（国立国会図書館憲政資料室所蔵「品川弥二郎関係文書」八六八、「第二回総選挙関係電報」）。
- (10) 前掲『伊勢市史』四巻 近代編、三〇六～三〇七頁。なお、第二回総選挙については、加地直紀氏が「第二回総選挙と尾崎行雄」（『平成法政研究』二五巻二、二〇二二年）で検討されている。
- (11) 明治（二五）年（二）月一七日付大隈重信宛尾崎行雄書簡

- (10) 『早稲田大学大学史資料センター編。大隈重信関係文書』三卷「みすず書房、二〇〇六年」、一四八頁。
- (11) 『伊勢新聞』明治三十五年三月六日号雑報「県会議員候補者近況 度会郡」、一一日号雑報「各郡県会議員選挙の結果 度会郡」、一二日号雑報「各地選挙会の詳況 度会郡」。
- (12) 『伊勢新聞』明治三十五年三月一六日号雑報「宇治山田町諸団体の景況」。
- (13) 『伊勢新聞』明治三十五年三月一七日号雑報「好友会の発会式」、五月三日号雑報「好友会の総会」。
- (14) 『伊勢新聞』明治三十五年六月一六日号雑報「南勢の二団体」。
- (15) 『伊勢新聞』明治三十五年七月二日号雑報「高木氏の誘説」。
- (16) 『伊勢新聞』明治三十五年五月九日号雑報「好友会春期大会」。
- (17) 『伊勢新聞』明治三十五年五月九日号雑報「尾崎代議士の報告演説」。
- (18) 『伊勢新聞』明治三十五年五月九日号雑報「尾崎代議士の報告演説」。
- (19) 『伊勢新聞』明治三十五年五月九日号雑報「尾崎代議士の報告演説」。
- (20) 『伊勢新聞』明治三十五年五月九日号雑報「尾崎代議士の報告演説」。
- (21) 『立憲改進黨党報』一一号党報「三重県に於ける演説及懇親会」。
- (22) 『伊勢新聞』明治三十二年六月一日号雑報「尾崎、島田両氏等の一行」、「政談演説会」、「尾崎代議士の演説筆記」、六月二日号雑報「尾崎行雄君演説筆記」。
- (23) 注(21)に同じ。
- (24) 『立憲改進黨党報』一二号党報「尾崎代議士の報告演説」、六月一七日に度会郡田丸町の第二部好友会事務所に赴いた後、中川村で演説して改進黨への入党者三名、好友会への加入者二七名を獲得した。さらに、六月一八日に度会郡七保村、一九日に瀧原村・柏崎村(入党者二名)、二〇日に北牟婁郡長島村(入党者三名)、二一日に相賀村(入党者二〇余名)、二四日に南牟婁郡本木町(入党者多数)、二五日に阿田和村(入党者五五名)、二七日に和歌山県東牟婁郡新宮町、二八日南牟婁郡荒坂村、二九・三〇日に度会郡吉津村(入党者五〇余名)、同三〇日に中島村、七月一日に南海村、二日に穂原村・五ヶ所村、三日に神原村・英虞郡鶴方村、四日に波切村、五日に答志郡加茂村で政談演説を行った。入党者の記録は『立憲改進黨党報』でも曖昧な点はあるが、この日程の中で二〇〇名以上を数えている。
- (25) 『立憲改進黨党報』一三三号党報「尾崎代議士の報告演説」。
- (26) 『立憲改進黨党報』一九号党報「三重県に於ける各地改進黨大会」。
- (27) 『伊勢新聞』明治三十二年六月一五日号雑報「自由主義者の臨時大会」、「自由党党報」四〇号党報「我党支部」。
- (28) 国立国会図書館憲政資料室所蔵「龍野周一郎関係文書」一六四、「三重県漫遊要録」三重紀行序文。この「三重県漫遊要録」は龍野周一郎による明治三十二年七月一五日から八月一

『立憲改進黨党報』一三三号党報「尾崎代議士の報告演説(続)」。  
なお、尾崎の遊説日程は以下の通りである。

六月一七日に度会郡田丸町の第二部好友会事務所に赴いた後、中川村で演説して改進黨への入党者三名、好友会への加入者二七名を獲得した。さらに、六月一八日に度会郡七保村、一九日に瀧原村・柏崎村(入党者二名)、二〇日に北牟婁郡長島村(入党者三名)、二一日に相賀村(入党者二〇余名)、二四日に南牟婁郡本木町(入党者多数)、二五日に阿田和村(入党者五五名)、二七日に和歌山県東牟婁郡新宮町、二八日南牟婁郡荒坂村、二九・三〇日に度会郡吉津村(入党者五〇余名)、同三〇日に中島村、七月一日に南海村、二日に穂原村・五ヶ所村、三日に神原村・英虞郡鶴方村、四日に波切村、五日に答志郡加茂村で政談演説を行った。入党者の記録は『立憲改進黨党報』でも曖昧な点はあるが、この日程の中で二〇〇名以上を数えている。

(25) 『立憲改進黨党報』一三三号党報「尾崎代議士の報告演説」。

(26) 『立憲改進黨党報』一九号党報「三重県に於ける各地改進黨大会」。

(27) 『伊勢新聞』明治三十二年六月一五日号雑報「自由主義者の臨時大会」、「自由党党報」四〇号党報「我党支部」。

(28) 国立国会図書館憲政資料室所蔵「龍野周一郎関係文書」一六四、「三重県漫遊要録」三重紀行序文。この「三重県漫遊

要録」は龍野周一郎による明治三十二年七月一五日から八月一

- 日までの三重県における遊説日記である。龍野は長野県出身で、明治一四年自由党に参加し、明治三年に立憲自由党の遊説員兼事務員となる。長野県小県郡会議員（明治二四年）、長野県会議員（明治二五年）に選出される一方、明治三二年、第五回総選挙で衆議院議員に初当選し、以後、第六・七・八・一四回総選挙で当選、自由党 憲政党 立憲政友会に所属した（竹林昌子「稀本あれこれ（四一七）甲午西遊録」、『国立国会図書館月報』四九九号、二〇〇二年）。
- (29) 同右、明治二六年七月一五、二九日条。
- (30) 『伊勢新聞』明治二六年八月一日号雑報「南勢に於ける星氏乃一行」、八月四日号雑報「宇治山田町に於ける星亨氏の演説」、八月五日号雑報「宇治山田町に於ける星亨氏の演説」。
- (31) 『三重県漫遊要録』明治二六年七月二九日条、『自由党党報』四三号党報「三重県に於ける星氏の一行」。
- (32) 『三重県漫遊要録』明治二六年七月三〇日条。
- (33) 自由党の機関紙となった『伊勢新聞』が度会郡磯村で自由党員の加盟者が九〇余名、度会郡中島村では改進黨及び好友会を脱して自由党及び正義会に加盟した者が五〇余名あったことを報じている（『伊勢新聞』明治二六年一〇月一〇日号雑報「度会郡に於る吾党の加盟」、『伊勢新聞』明治二六年一〇月二二日号雑報「度会郡に於ける吾党の加盟」）。
- (34) 『自由党党報』五三号党報「本部の通知書」。
- (35) 前掲「龍野周一郎関係文書」一六九、「選挙の塵」明治二七年一月二一日条。
- 「選挙の塵」は明治二七年一月一日から二月四日までの龍野周一郎の日記である。第三回総選挙における具体的様相が明記された一次史料として、その価値は高い。本史料については、中元「日記で読む政治史 龍野周一郎と明治期の総選挙」（国立国会図書館ホームページ <https://www.ndl.go.jp/nikk/essay/05/>）、「三重県漫遊要録」と併せて紹介しており、参照されたい。
- (36) 『毎日新聞』明治二七年一月二二日号雑報「総選挙候補黨報 三重県」。
- (37) 『郵便報知新聞』明治二七年一月三〇日号雑報「總撰舉黨報地方 三重県第五區の新候補者」。
- (38) 『選挙の塵』明治二七年一月二二日条。
- (39) 注(37)に同じ。
- (40) 明治二七年一一付二七日付栗原亮一宛門野幾之進書簡（国立国会図書館憲政資料室所蔵「栗原亮一関係文書」二七）。
- (41) 『扶桑新聞』明治二七年一月五日号雑報「改進黨臨時大会」。
- (42) 『読売新聞』明治二七年一月二一日号雑報「楠本正隆氏大隈伯を訪ふ」。
- (43) 『伊勢新聞』明治二七年一月五日号雑報「第五区に対する改進黨の通牒」、一九日号雑報「好友会の役員会、森本氏の入党」。
- (44) 『伊勢新聞』明治二七年一月二〇日号雑報「森本氏は熟考中なり」、二三日号雑報「新藩閥党角前代議士を強迫す」。



- (45) 『伊勢新聞』 明治二十七年一月二十四日号雑報「角前代議士の答弁」。
- (46) 『伊勢新聞』 明治二十七年一月二十四日号雑報「好友会と角氏」。
- (47) 明治(二七)年(一)月二三日付大隈重信宛尾崎行雄書簡(前掲『大隈重信関係文書』三巻、一四九頁)。この書簡が出される四日前の一月二日に尾崎は既に宇治山田に戻っており、尾崎自身も選挙区の状況を良く承知していた(『伊勢新聞』 明治二十七年一月二三日号雑報「尾崎愕堂選挙区に帰る」)。
- (48) 注(11)に同じ。
- (49) 注(37)に同じ。
- (50) 『読売新聞』 明治二十七年一月三〇日号雑報「学堂、得堂轡を並べて打て出」、『日本』 明治二十七年一月三〇日号雑報「選挙彙聞 三重」。
- (51) 『日本』 明治二十七年二月一日号雑報「同盟、同志政社選挙の現況(楠本正隆氏の書簡)」。
- (52) 『日本』 明治二十七年一月二二日号雑報「尾崎學堂」、『伊勢新聞』 明治二十七年一月二三日号雑報「尾崎愕堂選挙区に帰る」。
- (53) 『伊勢新聞』 明治二十七年一月三一日号雑報「尾崎氏の二見行」。
- (54) 『伊勢新聞』 明治二十七年二月三日号雑報「改進黨演説(中止解散)」。
- (55) 『伊勢新聞』 明治二十七年二月一六日号雑報「改派の勢日に非なり」。
- (56) 前掲『尾崎愕堂全集』一一巻、二五八〜二五九頁。
- (57) 『毎日新聞』 明治二十七年二月一〇日号雑報「門野幾之進氏忠告を容れず」。
- (58) 『万朝報』 明治二十七年二月一五日号雑報「各地候補者談 三重県第五区」。
- (59) 『東京朝日新聞』 明治二十七年二月六日号雑報「代議士候補談 三重県」。
- (60) 『伊勢新聞』 明治二十七年二月一日号雑報「門野溝口両氏入区の景況」。
- (61) 『伊勢新聞』 明治二十七年二月二三日号雑報「政談演説会」。
- (62) 『日本』 明治二十七年二月二日号雑報「選挙彙聞 三重」。
- (63) 前掲加地「第三回帝國議會衆議院議員総選挙と尾崎行雄」。
- (64) 『伊勢新聞』 明治二十七年二月七日号雑報「門野氏は外教信者に非らず」。
- (65) 『伊勢新聞』 明治二十七年二月一日号雑報「門野溝口両氏入区の景況」、『二三日号雑報「尾崎行雄氏基督教徒たるの確証を表白せん」』。
- (66) 注(40)に同じ。
- (67) 『伊勢新聞』 明治二十七年二月二〇日号電報「板垣伯の着田」。
- (68) 『伊勢新聞』 明治二十七年二月二日号雑報「板垣総理一行政談大演説会」、『板垣総理の一行演説日割』。
- (69) 『自由新聞』 明治二十七年二月三日号雑報「選挙彙報 三重県」。
- (70) 『伊勢新聞』 明治二十七年二月二七日号雑報「板垣総理の応援弁士」。

- (71) 『東京朝日新聞』 明治二十七年二月二二日号雑報「板垣伯、門野氏と第一区」。
- (72) 『東京朝日新聞』 明治二十七年二月二七日号雑報「森川、栗原、門野氏」。
- (73) 『伊勢新聞』 明治二十七年二月二八日号雑報「第五区改進黨の売国演説」。
- (74) 大日方純夫『日本近代の歴史2「主権国家」成立の内と外』（吉川弘文館、二〇一六年）、二二五頁。
- (75) 『伊勢新聞』 明治二十七年三月七日号電報「第五区当選者」。

〔付記〕 本稿作成につき、国立国会図書館の御高配を賜った。ここに謝意を表したい。

(中京大学文学部教授)